

個別的自己評価が自尊心に及ぼす影響

—重要性と他者からの評価の調整効果—

長谷川 孝治（信州大学人文学部）

The Influence of Specific Self-appraisals on Self-esteem : The Moderate Effects of Importance of Self-appraisals and Actual Appraisals from Significant Other

Koji Hasagawa

要 約

本研究では、個別的自己評価が自尊心に及ぼす影響過程に対して、重要性と他者からの評価が調整要因として機能するかが検討された。さらに、反映的自己評価は個別的自己評価や他者からの評価に代わって、自尊心に影響を与えるかどうかについても検討された。分析の結果、まず、個別的自己評価と重要性と他者からの評価が自尊心に及ぼす影響過程については、優しさに関して他者からの評価と重要性の交互作用が見出された。優しい自分というものに対して重要だと認知している場合には、他者からの評価の高さによって自尊心レベルが影響を受けることが示唆された。また、反映的自己評価と重要性と他者からの評価が自尊心に及ぼす影響過程については、運動能力と知性に関して3要因の交互作用が見出された。両者とも重要性を高く評価している場合には、他者からの評価が低く、反映的自己評価も低い場合に最も自尊心が低下するという知見が得られた。これは、自尊心が他者からの拒絶を検知するメーターであるというソシオメーター仮説を支持するものである。最後に、個別的自己評価と重要性と反映的自己評価が自尊心に及ぼす影響過程については、外見に関して3要因の交互作用が見出された。外見に関して重要性を高く認知しており、友人からの反映的自己評価が低く、個別的自己評価も低い場合には自尊心が低くなることが示された。以上の結果から、自尊心の形成要因について考える際、従来指摘されてきた、個別的自己評価とその重要性だけではなく、他者からの評価や反映的自己評価を考慮する必要があることが示唆された。

キーワード：個別的自己評価、重要性、反映的自己評価、他者からの評価

問 題

自尊心 (self-esteem) とは自己に関する全体的な評価を指す概念であり (Rosenberg, 1965), 社交能力や運動能力などのさまざまな個々の評価によって影響を受けて形成される (山本・松井・山成, 1982)。この様々な側面の自己評価は個別的自己評価 (specific self-evaluations) と呼ばれ, 個別的自己評価が自尊心にどのように影響を与えるかについてはいくつかのモデルが考案されている。

ひとつは単純加算モデルである (Shavelson, Hubner, & Stanton, 1976)。これは, 自尊心を個別的な自己評価を単純加算した総体として捉えるモデルである。このモデルによると, 社交能力や運動能力など, 個別的自己評価が高いほど, 全体としての自己評価である, 自尊心も高くなるとされる。

この単純加算モデルと対立するのが, 重みづけモデルである (Harter, 1986)。これは個別的自己評価の重要性を考慮したモデルである。このモデルによると, 例えば, 次のような場合には個別的自己評価の単純加算結果は同じでも, 全体的な自尊心レベルに違いが出てくることになる。AさんとBさんはいずれも社交能力も運動能力もともに低いと自己評価しており, 知的な能力を高く評価している。しかしながら, AさんとBさんは個々の自己評価の重要性が異なる。つまり, Aさんは自ら低く評価している社交能力と運動能力について, それらの重要性を低く認知しているが, 高く評価している自己の知的な能力については非常に高く重要視している。ところがBさんは, 知的能力を高く評価し, 重要性も高く認知しているが, 自ら低いと評価する社交能力や運動能力についても同様に, それらの重要性を高く認知しているのである。このような場合, 重みづけモデルでは, 全体的な自尊心レベルはAさんの方がBさんよりも高くなると予測されるのである。たとえ個別的な自己評価が低くても, その重要性を低く認知すれば, 自尊心にはほとんど影響を与えないと考えられるのである。Harter (1986) は, このモデルの妥当性を子どもの有能感に関する研究において実証的に明らかにしている。

これら2つのモデルは自尊心の形成過程について, それぞれ有益な示唆を与えてくれる。高い個別的自己評価の数が多いほど, そして, 高い個別的自己評価の重要性を高く認知するほど自尊心が高くなると考えられる。しかしながら, これらのモデルでは自己評価についての重要な側面が考慮されていない。それは, 自己評価の社会的な側面である。

自己評価は自己のみによって形成されるものではなく, 他者との相互影響過程の中で形成される (Swann, 1987; McNulty & Swann, 1994)。これは, これまで行動的確証 (behavioral confirmation) として検討されてきたプロセスであり (e.g., Snyder & Swann, 1978; Snyder, Tanke, & Berscheid, 1977), 自己評価が他者からの評価によって影響を受けるプロセスのことである。具体的に言えば, 他者からポジティブな評価が与えられれば, それに伴って自己評価が高くなるというプロセスが存在するということである。この知見から考えると, 自尊心に影響を与える要因として, 個別的自己評価と重要性だけでなく, その個別的自己評価に対する他者からの評価を考慮する必要性が示唆される。例えば, 社交能力について高く評価していて, かつ重要だと認知していても, 他者からの評価が高い場合と低い

場合とでは、全体的な自尊心レベルが異なってくる可能性がある。本研究では、自尊心に影響を与える要因として、従来の個別的自己評価やその重要性に加えて、他者からの評価を採りあげ、その効果を検討する。このことによって、従来の自尊心形成モデルに他者からの評価の影響を組み入れた新たなモデルを提示することが可能となる。具体的に言えば、個別的自己評価と重要性と他者からの評価という3つの要因が自尊心にどのような影響を与えるかを実証的に検討するということである。

さらに、本研究では他者からの評価に加え、反映的自己評価 (reflected self-appraisals) を検討対象にする。これは、従来、象徴的相互作用論の中で議論されてきた概念である (Cooley, 1902; Mead, 1934)。この理論では、自己は他者との相互作用の中で形成され、自己に対する他者の評価が、その人からどのように評価されているかという反映自己や鏡映自己 (looking-glass self) と呼ばれる自己表象を形成し、続いて、それが現実の自己評価に反映されると捉えられてきた。このように、反映的自己評価は、他者からの評価が自己評価に影響を与えるプロセスを仲介する変数として機能すると想定されてきたのである。しかしながら、これまでの多くの実証的な先行研究ではこのような反映的自己評価の仲介過程はほとんど見いだされず (Shrauger & Schoeneman, 1979)、逆に自己評価が反映的自己評価を規定する投影過程が顕著であることが明らかにされた (Ichiyama, 1993)。つまり、自己評価が高い人は、それを投影する形で、他者からも高く評価されているであろうと推測することが多いということである。この知見と本研究の目的を併せて考えると、個別的自己評価の代わりに反映的自己評価を用い、自尊心を予測することも有用であることが示唆される。このことは近年注目されている自尊心についてのソシオメーター仮説からも了解可能である (Leary, 2004)。ソシオメーター仮説によると、自尊心は他者から受け入れられているか否かを示す、一種のメーターであるとされる。他者から拒絶されることは集団で生活してきた太古の人間にとっては生存に関わる問題であり、それが進化のプロセスの中で適応を図る仕組みとして保持されてきたという考え方である。この仮説では自尊心が低くなることは、他者から拒絶されているかもしれないという認知を反映しているとされ、このことは実証的に明らかにされている (Leary, 2004)。したがって、本研究では、反映的自己評価を自尊心に影響を与える変数として採りあげる。具体的には、反映的自己評価と重要性と他者からの評価の3つの要因が自尊心に与える影響について検討する。

また、本研究では反映的自己評価を他者からの評価の代わりに用いて同様の検討を行う。先に述べたように、反映的自己評価は他者からの評価の反映というよりも、自己評価の投影としての側面が強い (Shrauger & Schoeneman, 1979; Ichiyama, 1993)。しかしながら、個別的な自己評価を扱った研究では、他者からの評価の反映としての機能を確認した先行研究もある。例えば、長谷川・浦 (1999) は、大学生の友人ペアを被調査者としてパネル調査を実施し、自己評価に関する自他の相互影響過程について検討した。その結果、友人関係が形成された初期段階において、他者からの評価が反映的自己評価を仲介し、自己評価を規定するプロセスを個別的自己評価に関する結果で見出した。また、長谷川 (2000) では、このプロセスが特に個別的自己評価のうち、他者から認知されやすい外的な側面に顕著であることを明らかにした。このように、個別的自己評価を扱う場合に限れば、反映的自己評価は文字通り他者からの評価を反映するものである可能性が考えられる。これらの知見から考えて、

本研究では次のような検討も併せて行うこととする。すなわち、個別的自己評価と重要性と反映的自己評価が自尊心に及ぼす影響についての検討である。この場合の反映的自己評価は他者からの評価の代わりとして扱うものであり、従来の象徴的相互作用論における考え方と一致する (Cooley, 1902; Mead, 1934)。象徴的相互作用論では、反映的自己評価のことを反映的评价 (reflected appraisal) と呼ぶことが多い (Ichiyama, 1993)。これは反映的自己評価を自己の一側面としてよりも、他者評価の一側面として捉えた呼び方である。ここで示した本研究での検討は、まさに反映的评价の機能を検討するものともいえる。

以上の議論より、本研究では個別的自己評価が自尊心に与える影響プロセスについて、以下の3つの側面から検討を行う。

- 1) 個別的自己評価と重要性と他者からの評価が自尊心に及ぼす影響
- 2) 反映的自己評価と重要性と他者からの評価が自尊心に及ぼす影響
- 3) 個別的自己評価と重要性と反映的自己評価が自尊心に及ぼす影響

ここでの反映的自己評価とは、全体的な評価ではなく個別的な評価である。具体的には、社交、運動、知性など様々な自己の側面に関して、他者からどのように評価されていると思うかという推測のことである。

また、これらの検討のために、本研究では大学生の友人ペアに対するパネル・データを用いる。ペアデータを用いることで、重要他者である友人からの実際的评价を測定することができる。さらに、パネル・データを用いることで、初期の自尊心レベルを統制して、後の自尊心レベルの変化を検討することができ、因果関係まで言及することが可能となる。

方 法

被調査者と調査の概要

被調査者は、比較的親しい関係にある大学1年生114名 (男子58名, 女子56名) である。

調査は、心理学の授業の終わりに集合一斉法で行われた。その際、被調査者に対して、「この調査はその性質上、親しい友人とペアで参加してもらい形態をとる」と教示し、その場でペアを作ってもらった。そして、各ペアに対して、次のセットを配布した。それは、封筒 (大) の中に「封筒 (小) 2部と質問紙2部」が入っているものである。そして続けて、個人のプライバシーを保持するため、次のような教示を行った。それは、「質問紙に回答した後、封筒 (小) にそれを入れ、密封してください。そして、それぞれそのように処理した封筒 (小) 2部をもとの封筒 (大) の中に入れ、密封して提出して下さい。」というものである。回答した各ペアの質問紙のセットは、その場でペアがつかれなかった者を考慮して、2週間後に提出を求めた。

また、調査はパネル・データを採取する目的で、約3カ月の期間をあけて2回行われた。第1回調査は、被調査者が大学に入学した直後である1996年4月中旬 (以下、Time 1)、第2回調査 (以下、Time 2) は、大学入学3カ月後の1996年7月中旬に実施した。大学1年生に対するこれら2時点における調査によって、大学入学直後に新たに形成された対人関係について、その形成直後から3か月間の進展過程を捉えたデータであるといえる。両調査時点ともに、同様の質問紙に回答を求めた。

質問紙の構成

1) 個別的自己評価

自己認知の諸側面尺度（山本・松井・山成，1982）の社交・スポーツ・知性・容貌・優しさ・生き方の各因子から因子負荷量の高い2項目ずつを選び出し，12項目を個別的自己評価の尺度として用いた。この尺度は，自己に関して示されたさまざまな特徴について，自分どの程度あてはまるかを問うものである。例えば，社交因子の場合，「社交能力に自信がある」，「交際範囲が広い」という項目である。回答は，各項目内容に対して，「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で評定させた。Time 1の尺度のこれら12項目に対して，因子分析（主成分法・プロマックス回転）を行い，想定した6つの因子を確認した。各因子を構成する項目を合計し，それぞれ社交・スポーツ・知性・容貌・優しさ・生き方に関する個別的自己評価得点とした（ $\alpha = .76 \sim .93$ ）。得点が高いほど，それぞれの個別的な自己評価が高いことを意味する。

2) 個別的自己評価の重要性

個別的自己評価尺度の各項目に対して，それぞれ自分にとってどのくらい重要であると思うかを尋ねた。回答は，各項目に対して，「重要でない」から「重要である」までの5件法で評定させた。想定した6つの因子それぞれに当てはまる項目を合計し，社交・スポーツ・知性・容貌・優しさ・生き方に関する重要性得点とした（ $\alpha = .56 \sim .84$ ）。得点が高いほど，それぞれの個別的自己評価について，重要であると認知していたことを意味する。

3) 反映的自己評価

個別的自己評価尺度の各項目を，パートナーからどう思われていると予想するかを問うものにワーディングし直して用いた（5件法）。具体的には，まず，被調査者にこの調査でのパートナーを思い浮かべさせ，自己に関して示されたさまざまな特徴について，その人からどう思われているかを想像して答えさせる形式をとった。Time 1の尺度のこれら12項目に対して，因子分析（主成分法・プロマックス回転）を行い，想定した6つの因子を確認した。各因子を構成する項目を合計し，それぞれ社交・スポーツ・知性・容貌・優しさ・生き方に関する反映的自己評価得点とした（ $\alpha = .64 \sim .91$ ）。得点が高いほど，各個別的自己に関する反映的自己評価が高いことを意味する。

4) 他者からの評価

個別的自己評価尺度の各項目を，パートナーに対する評価を測定するようにワーディングし直して用いた（5件法）。具体的には，被調査者にこの調査でのパートナーを思い浮かべさせ，自己に関して示されたさまざまな特徴が，パートナーにどの程度あてはまるかを答えさせる形式をとった。分析には，この得点はペアで相互に入れ替えられ，被調査者に対する他者評価の得点として用いられた。被験者aにとっての他者からの評価得点とは，そのaのパートナーとなった被調査者のaに対する得点である。Time 1の尺度のこれら12項目に対して，因子分析（主成分法・プロマックス回転）を行い，想定した6つの因子を確認した。各因子を構成する項目を合計し，それぞれ社交・スポーツ・知性・容貌・優しさ・生き方に関する他者からの評価得点とした（ $\alpha = .59 \sim .88$ ）。得点が高いほど，それぞれの個別的自己に関する他者からの評価が高いことを意味する。この得点が高いほど，aはパートナーから高く評価されていることを意味する。

5) 自尊心

自己全体への評価を測る Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の邦訳版 (山本・松井・山成, 1982) の10項目を用いた。回答は、各項目内容に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で評定させた。分析には10項目の合計得点を用いた (Time 1: $\alpha = .84$; Time 2: $\alpha = .86$)。この得点が高いほど全体的な自己評価が高いことを意味する。

結 果

各尺度と自尊心との単純相関

Time 1 の個別的自己評価と Time 1 および Time 2 の自尊心との相関を算出したところ、 $r = .24 \sim .76$ ($ps < .05$) であり、いずれも有意な正の関連を示した。このことは、個別的自己評価が高いほど、自尊心が高くなることを示している。

また、Time 1 の重要性と Time 1 および Time 2 の自尊心との相関を算出したところ、 $r = -.11 \sim .18$ (*ns.*) であり、いずれも有意な関連を示さなかった。これは、個別的自己評価の重要性が高くて低くても、そのことによって自尊心レベルは規定されないことを示している。

さらに、Time 1 の反動的自己評価と Time 1 および Time 2 の自尊心との相関を算出したところ、 $r = .20 \sim .43$ ($ps < .05$) であり、いずれも有意な正の関連を示した。このことは、反動的自己評価が高いほど、自尊心が高くなることを示している。

最後に、Time 1 の他者からの評価と Time 1 および Time 2 の自尊心との相関を算出したところ、社交・運動に関する他者からの評価と Time 1 と Time 2 の自尊心との相関は、 $r = .20 \sim .28$ ($ps < .05$) であり、有意な正の関連を示した。優しさに関する他者からの評価と Time 2 の自尊心との相関は、 $r = .23$ ($p < .05$) であり、有意な正の関連を示した。その他の側面の他者からの評価と自尊心との関連はいずれも有意な関連は見出されなかった (*ns.*)。これらの結果から、他者からの評価については、自己の側面によって自尊心に影響を与えるものと与えないものがあることが示唆された。

個別的自己評価と重要性と他者からの評価が自尊心に及ぼす影響

まず、個別的自己評価と重要性と他者からの評価のそれぞれについて、標準化得点を算出した。さらに、それぞれ掛け合わせ、2 要因および3 要因の交互作用項を作成した。

その上で以下に示すような手続きで、階層的重回帰分析を行い、個別的自己評価と重要性と他者からの評価が Time 2 の自尊心に及ぼす影響について検討した。基準変数は、Time 2 の自尊心である。説明変数の投入順は、次の通りである。まず、Step 1 に Time 1 の自尊心を投入し、統制する。このことで Time 1 から Time 2 にかけての自尊心の高まりを検討することができる。次に、Step 2 に Time 1 の個別的自己評価、重要性、他者からの評価の各標準化得点を投入し、Step 3 に各説明変数を組み合わせた3つの2 要因の交互作用項、Step 4 に各説明変数の3 要因の交互作用項を1つ投入した。それぞれの Step ごとの R^2 の増加分の有意性検定を行い、 R^2 の有意な増加が認められた場合には、影響力の大きさと方向性について β 係数を検討した。

優しさに関する個別的自己評価の結果を表1に示した。これを見ると明らかなように、Step 3の R^2 の増加分が有意であり、各2要因の交互作用項の β 係数が有意であった。そこで、各2要因の交互作用項について、上述と同様の手続きで2要因の階層的重回帰分析を行った。その結果、有意または有意な傾向の β 係数を示したのは他者評価×重要性の2要因の交互作用項のみであり、その他の交互作用項は有意ではなくなった。したがって、Aiken & West (1991)の手続きに基づいて、他者評価×重要性の2要因の交互作用項の下位検定を行った。結果を図1に示した。これを見ると、重要性が低い場合には他者からの評価が高くても低くてもTime 2の自尊心レベルには差がないことが分かる。しかしながら、重要性が高い場合には他者からの評価が高ければ、Time 2の自尊心レベルが高まることが示された。この結果は自尊心の形成プロセスに関する重要性の重みづけモデルに対して、他者からの評価を組み入れる必要があることを示唆するものである。

その他の個別的自己評価の側面に関しては、3要因の交互作用項が有意なものはひとつもなかった。また、外見に関して、個別的自己評価×重要性和個別的自己評価×他者からの評価の各2要因の交互作用項が有意であった。しかし、これらについて下位検定のために2要因の階層的重回帰分析を行ったところ、有意な交互作用効果が消失してしまった。また、運動能力に関して、個別的自己評価×他者からの評価の交互作用項が有意であったが、上述と同様の手続きによって、有意性が消失してしまった。さらに、運動能力に関しては、他者からの評価×重要性の2要因の交互作用項が有意であったが、これについては以下の反動的自己評価と重要性和他者からの評価が自尊心に与える影響でとりあげる。

反動的自己評価と重要性和他者からの評価が自尊心に及ぼす影響

反動的自己評価についても上述と同様に標準化得点を算出し、重要性および他者からの評価の標準化得点と組み合わせ、2要因と3要因の交互作用項を作成した。

また、上述の手続きと同様に、反動的自己評価と重要性和他者からの評価が自尊心に及ぼ

表1 Time 2の自尊心に対する階層的重回帰分析(優しさ)

	β	ΔR^2
Step 1		
Time 1の自尊心	0.66**	0.56**
Step 2		
個別的自己評価(個別)	0.12†	
重要性(重要)	0.16*	
他者からの評価(他者)	0.00	0.06**
Step 3		
個別×他者	-0.11†	
他者×重要	0.15*	
個別×重要	0.14†	0.04*
Step 4		
個別×重要×他者	0.06	0.00

† $P < .10$, * $P < .05$, ** $P < .01$,

す影響について検討するために階層的重回帰分析を行った。分析の結果、運動能力と知性に関して、反映的自己評価×重要性×他者からの評価の3要因の交互作用項が有意または有意な傾向を示した ($p < .10$)。運動能力に関する結果を表2に示す。これを見ると、Step 3が有意であり、上述した他者からの評価×重要性の2要因の交互作用項と、さらに他者からの評価×反映的自己評価の2要因の交互作用も有意であることが分かる。しかしながら、これ

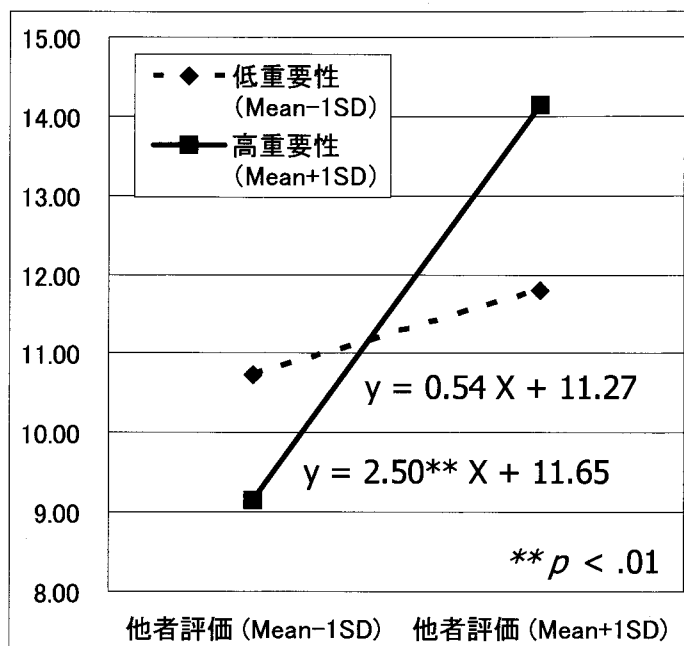
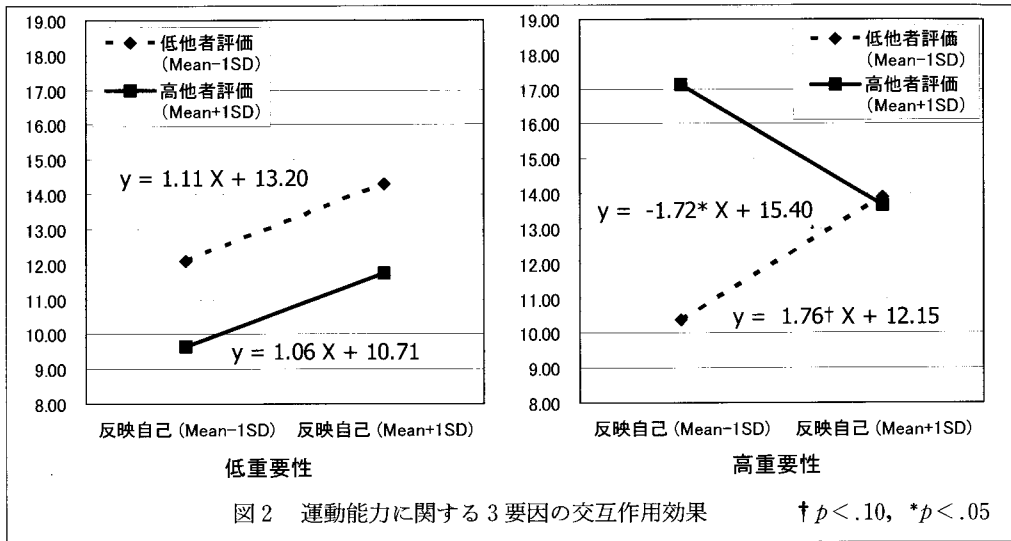


図1 優しさに関する他者からの評価と重要性が自尊心に及ぼす影響

表2 Time 2の自尊心に対する階層的重回帰分析(運動能力)

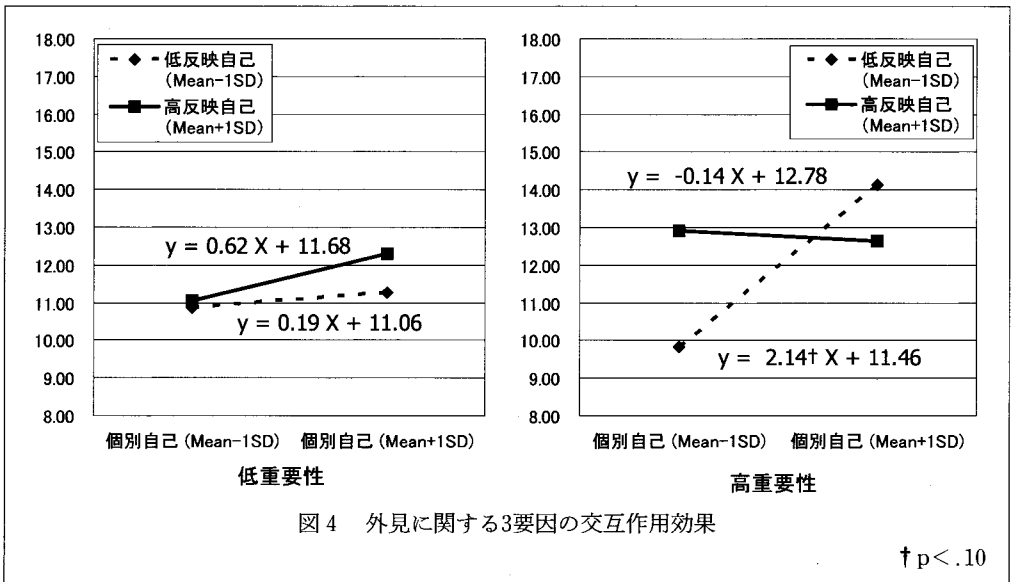
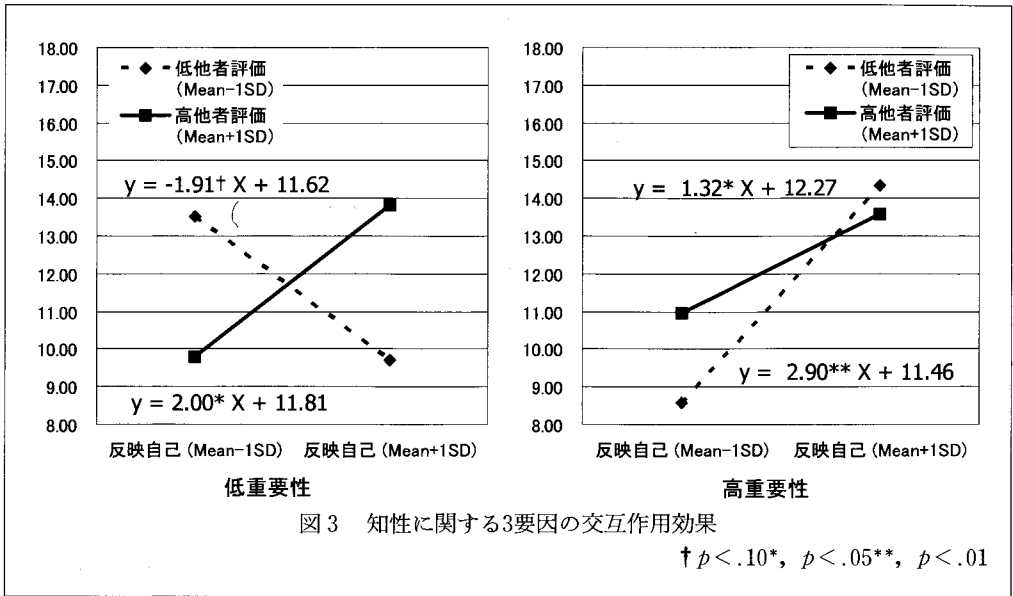
	β	ΔR^2
Step 1		
Time 1の自尊心	0.70**	0.56**
Step 2		
反映的自己評価(反映)	0.08	
重要性(重要)	0.13	
他者からの評価(他者)	0.03	0.01
Step 3		
反映×他者	-0.12†	
他者×重要	0.22**	
反映×重要	-0.09	0.06**
Step 4		
反映×重要×他者	-0.16†	0.01†

† $P < .10$, * $P < .05$, ** $P < .01$,



ら2要因の交互作用はStep 4として投入された3要因の交互作用に含まれるため、下位検定は3要因の交互作用項のみについて行った(図2)。これを見ると、運動能力について重要性を高く認知し、他者からの評価が高く、反動的自己評価が低い場合には自尊心が高くなることが示されている。また、重要性を高く認知し、他者からの評価が低く、かつ反動的自己評価が低い場合には自尊心が低くなることを示されている。これに対して、運動能力に関する重要性が低い場合には、他者からの評価の高低いずれの条件においても、反動的自己評価が高くても低くても、自尊心レベルに差がないことが示されている。これらの結果は、運動能力を重視していて、友人からの評価を低く推測する場合には、友人の実際の評価の高さによって、自尊心レベルが影響を受けることを示唆するものである。

さらに、知性についての3要因の交互作用項の下位検定の結果を図3に示した。これを見ると、知性に関して重要性を高く認知している場合には、全体的に反動的自己評価が低いほど自尊心が低くなることを示されていることが分かる。特に、他者からの評価が低く、反動的自己評価が低い場合に最も自尊心が低下する傾向がある。これに対して、知性に関して重要性が低い場合は複雑である。重要性を低く認知していても、他者からの評価が高い場合には、反動的自己評価が高ければ自尊心は高くなる。しかしながら、重要性を低く認知していても、他者からの評価も低い場合には、反動的自己評価が低いほど、自尊心が高まるという結果が示されたのである。この結果の解釈は少し注意が必要である。自分が全く重要視していない自己の側面に関して、反動的自己評価が低く、他者からの評価が低いという場合は、自己確証理論から考えると(Swann, 1987)、ネガティブな自己を確証した場合である。そのような時には自分の認識の正しさを確認し、認知的な安定感を得ることができ、結果として後の自尊心が高まった可能性も考えられる。しかしながら、重要性が高い場合の結果にはこのような自己確証理論からの説明は当てはまらず、このデータのみからは確かな考察を行うのは困難である。この点について他の自己の側面との交互作用も含めて、今後、さらなる検討が必要である。



個別的自己評価と重要性と反映的自己評価が自尊心に及ぼす影響

これまでの手続きと同様に、個別的自己評価と重要性と反映的自己評価が自尊心に及ぼす影響について検討するために階層的重回帰分析を行った。分析の結果、外見に関してのみ3要因の交互作用項が有意であった。下位検定の結果を図4に示した。これを見ると、外見に関して重要性を高く認知しており、友人からの反映的自己評価が低い場合には、個別的自己評価が低くなるほど自尊心が低くなることが示されている。逆に言えば、重要性を高く認知して個別自己評価が高ければ、低い反映的自己評価を持っていても、自尊心は高くなるともいえる。また、これに対して、重要性が低い場合には、個別的自己評価および反映的

自己評価が高くて低くても、自尊心レベルに差がないことが示された。

考 察

本研究の結果、個別的自己評価が自尊心に及ぼす影響過程について検討する際、重要性と他者からの評価を考慮する必要性が示唆された。

まず、個別的自己評価と重要性と他者からの評価が自尊心に及ぼす影響の結果について考察する。この影響過程については、3要因の交互作用が見出されなかった。優しさに関して他者からの評価と重要性の交互作用が見出された。優しい自分というものに対して重要だと認知している場合には、他者からの評価の高さによって自尊心レベルが影響を受けることが示唆された。自尊心が個別的自己評価の重要性と他者からの評価という2つの要因によって規定されていることが実証的に明らかにされた。また、個別的自己評価と重要性の2要因が自尊心に及ぼす影響という従来の重みづけモデル (Harter, 1986) を支持するような結果は見出されなかった。ただし、この結果をもって直ちに重みづけモデルを棄却することは出来ない。なぜなら、本研究では、ひとつの個別的自己評価とそれに対する重要性が自尊心に及ぼす影響を検討したためである。重みづけモデルでは、複数の個別的自己評価と重みづけとの相互関係によって、自尊心レベルが規定されると考える。今後、複数の個別的自己評価と重要性との個人内相関を算出するなどの方法を用いて (Pelham & Swann, 1989)、この問題についてさらなる検討を行う必要がある。

次に、反動的自己評価と重要性と他者からの評価が自尊心に及ぼす影響の結果について考察する。この影響過程は運動能力と知性に関して3要因の交互作用が見出された。両者の個別的自己に共通して見出された結果は、重要性を高く評価している場合には、他者からの評価が低く、反動的自己評価も低い場合に最も自尊心が低下するという結果である。これは、運動能力と知性について友人から低く評価されていると予測し、実際に友人が低く認知している場合には、全体的な自尊心レベルが低下することを示唆する結果である。この結果は、自尊心が他者からの拒絶を検知するメーターであるというソシオメーター仮説を支持するものである。運動能力と知性に関して他者からの拒絶が実際に起こり、それを反動的自己評価によって推測できた場合には、自尊心が低下したのである。これが、重要性が高い自己評価について見出された点が興味深い。ソシオメーターは、自己が価値をおく属性についての拒絶に限って検知できるのかもしれない。

また、知性に関して重要性を高く認知しており、反動的自己評価が低い場合、他者からの評価が高くて自尊心は上昇しなかった。それに対して、運動能力では反動的自己評価が低くても、他者からの評価が高ければ自尊心が高まった。なぜ、知性と運動能力でこのような違いが生じたのかについては、本研究のデータからは明確にならない。例えば、大学生が調査対象者であったため、日常の生活場面で知性を問題にする機会が多く、友人がポジティブに評価してくれても、その人からの評価をネガティブに評価してしまうと全体的な自尊心は高まらなかったのかもしれない。それに対して、運動能力は大学生活で普段あまり吟味されないため、個別的自己評価の投影として友人からの評価を低く認知しても、実際の友人からポジティブに評価されればそれを反映させる形で自尊心が高くなったのかもしれない。この

ような考察は推測の域を出ないが、どの反映的自己評価の側面が他者からの評価を反映させやすく、逆に自己評価を投影させやすいかといった点について、今後より詳細な検討が必要である。

最後に、個別的自己評価と重要性和反映的自己評価が自尊心に及ぼす影響について考察する。この影響過程は外見に関してのみ3要因の交互作用が見出された。外見に関して重要性を高く認知しており、友人からの反映的自己評価が低く、個別的自己評価も低い場合には自尊心が低くなることが示された。逆に言えば、個別的自己評価は低くても友人からの評価に関してポジティブに推測したり、友人からの評価を低く推測しても個別的自己評価を高く保持できれば、自尊心は低下しないと解釈することもできる。ただし、この影響過程についての結果の解釈には注意が必要な点がある。それは個別的自己評価と反映的自己評価との相関の高さである。問題で述べたように、反映的自己評価は、多くの場合、自己評価を投影する形で形成される (Shrauger & Schoeneman, 1979; Ichiyama, 1993)。両者の関連についていえば、自己評価と反映的自己評価とは相互に相関が高いことが多い。したがって、もし本研究の検討について分散分析を用いて行ったとしたら、セルの人数に偏りが出て、このような分析を行うことそのものが不可能になっていたはずである。本研究では、説明変数を標準化し、交互作用項を作成し、階層的重回帰分析を分析に用いたため、この人数の偏りという問題を解消することができた。しかしながら、依然として個別的自己評価と反映的自己評価との相関の高さそのものは解消しきってはいない。したがって、本研究で得られたこの外見に関する結果において、個別自己評価が高く反映的自己評価が低い場合や、個別的自己評価が低く反映的自己評価が高い場合は現実には極めてまれな状態として解釈した方がよい可能性がある。

以上の結果から、自尊心の形成要因について考える際、従来の重みづけモデル (Harter, 1986) で示されたような個別的自己評価とその重要性だけではなく、他者からの評価や反映的自己評価を考慮する必要があることが示唆された。今後さらに、これらの要因が自尊心のみならず、他の精神的健康状態にどのような影響を与えているかを検討することも自己過程の解明にとって重要であると考えられる。

引用文献

- Aiken, L. S. & West, S. G. 1991 *Multiple Regression : Testing and Interpreting Interactions*. Thousand Oaks, CA : Sage.
- Cooley, C. H. 1902 *Human nature and social order*. New York : Scribner's.
- Harter, S. 1986 Processes underlying the construction, maintenance, and enhancement of the self-concept in children. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol.3. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates. Pp.137-181.
- 長谷川孝治 2000 自己評価に関する自他の相互影響過程と精神的健康との関連 広島大学大学院生物圏科学研究科博士論文 (未公刊).
- 長谷川孝治・浦 光博 1999 自己評価に関する自他の相互影響過程の変容についての検討 —アイデンティティー交渉の理論的枠組みを用いて— 社会心理学研究, 15, 110-124.
- Ichiyama, M. A. 1993 The reflected appraisal process in small-group interaction. *Social Psychol-*

- ogy Quarterly, **56**, 87-99.
- Leary, M. R. 2004 The sociometer, self-esteem, and the regulation of interpersonal behavior. In R. F. Baumeister & K. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation*. New York: Guilford.
- Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society*. Chicago: University of Chicago Press. (河村望 (訳) 1995 デューイ=ミード著作集 精神・自我・社会 人間の科学社)
- McNulty, S. E. & Swann, W. B., Jr. 1994 Identity negotiation in roommate relationships: The self as architect and consequence of social reality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 1012-1023.
- Pelham, B.W. & Swann, Jr. W. B. 1989 From self-conceptions to self-worth: On the sources and structure of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 672-680.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Shavelson, B. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. 1976 Self-concept: Validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*, **46**, 407-441.
- Shrauger, J. S. & Schoeneman, T. J. 1979 Symbolic interactionist view of self-concept: Through the looking glass darkly. *Psychological Bulletin*, **86**, 549-573.
- Snyder, M., & Swann, W. B., Jr. 1978 Hypothesis-testing processes in social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 942-950.
- Snyder, M., Tanke, E. D., & Berscheid, E. 1977 Social perception and interpersonal behavior: On the self-fulfilling nature of social stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 656-666.
- Swann, W. B., Jr. 1987 Identity negotiation: Where two roads meet. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1038-1051.